

あうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話 38

札幌の街並みが眼下に広がる
「大倉山ジャンプ競技場」。
だがここは山ではなく丘だった。

ジャンプは北大から

スキージャンプの起源は一八四〇年頃、ノルウェー・テレマーク地方が発祥とされ、明治十二（一八七九）年、同地方に住む靴屋の少年がオスロの丘で三メートル飛んだというのが、ジャンプ大会最初の記録として残っている。

では日本のスキージャンプはいつから始まったのかというと、大正五（一九一六）年、東北帝国大学農科大学（現在の北海道大学）水産学科の遠藤吉三郎教授が北欧への留学を終え、帰任してからと言われている。

以後農科大生がジャンプの研究を行い、北海道帝国大学となった後の大正十二（一九二三）年には、スキー部が三角山に「シルバーシャイツェ」というジャンプ台を建造。翌年、第一回北海道選手権大会が行われたが、優勝者の記録はわずか二メートル四〇にすぎなかった。

同年秋に学生たちはこのシャイツェを三〇メートル級に改造し、大正十五（一九二六）年に北大の村本金弥が二八メートル二〇の日本新記録をつかった。

ヘルセット中尉

昭和四（一九二九）年、ノルウェーからサンモリッツオリンピック・ノルウェーチームの監督であり、シャイツェ設計の権威でもあったオラフ・ヘルセット中尉ら三名が来道した。目的は、ジャンプ台の建設とノルディックスキーの技術指導であった。



大倉喜七郎男爵（大倉集古館所蔵）
ホテルオークラ創業者。自動車、囲碁、音楽、美術など文化・スポーツの多方面で広く貢献した

これは秩父宮がかねてから「日本で冬のオリンピックを開催するなら札幌をおいてない。そのためには大きなジャンプが必要」と語っており、大倉喜七郎男爵がその意を汲んで建設地の選定と設計のために、遠くノルウェーからヘルセツト中尉を招いたものだった。同年ヘルセツト中尉の要請で荒井山に「荒井山記念ジャンプ」が建設され、ジャンプ界は四〇メートル級時代に突入した。

この記念ジャンプの建設と並行して進められたのが、ヘルセツト中尉が設計した大ジャンプの建設であった。そして昭和

和六（一九三二）年十二月、世界に肩を並べる大ジャンプ台、「大倉ジャンプ」が完成した。翌年一月、初の競技として全日本学生大会が行われたが、東洋一の大ジャンプでの豪快なジャンプを観ようと二万人近くの観衆が詰めかけたという。

ジャンプ台を造ることができたのは、これまた大倉男爵のお陰であった。彼は私財を投じて建設することを快諾し、大倉土木株式会社（現在の大成建設）の工事により六〇メートル級のジャンプ台を完成させ、札幌市に寄贈した。ジャンプ台の「大倉」という名前は、当時の橋本正治札幌市長が、寄贈者大倉男爵の厚意に報いるとして名づけたものであった。

戦前、大倉ジャンプで不滅の大ジャンプと言われたのが、昭和十四（一九三九）年、浅木文雄が飛んだ七九メートルであった。しかし、オリンピックのために建設されたこのジャンプであったが、日中戦争



大倉ジャンプ（昭和11年）
『札幌市寫眞帖』より転載

の激化により開催権を日本政府が返上したため、世界の耳目を集めることはなかった。

「大倉山ジャンプ競技場」に改称

戦後は八〇メートル級のジャンプ台となったが、昭和三十八（一九六三）年、菊地定夫が一〇二メートルをマークし、ついに一〇〇メートルジャンプ時代となった。

その後一九七二年冬季オリンピック開催が札幌に決定したことから、大倉ジャンプは九〇メートル級のジャンプ会場として大幅な改修が行われ、K点一一〇メートル、五万人の観客収容可能な国立の競技場となった。ジャンプ競技場の名称も、大倉男爵由来の名前に「山」の文字が書き足され、「大倉山ジャンプ」は「大倉山ジャンプ競技場」という名前に変更となった。

実はジャンプ台のある場所は地図上では、大倉山という「山」ではなく、名の無い丘なのだが、選手たちが「大倉山に行く」といつも言っていたため、山を加えたという。

このジャンプ台で、笠合幸生や金野昭次、青地清二らが競り合いを繰り広げ、これが札幌オリンピックでの七〇メートル級の表彰台独占に繋がった。

街に近いジャンプ台

大倉山ジャンプ競技場は平成七（一九九五）年、国から札幌市に移管され、翌年にはK点一二〇メートルに改修された。

大倉山ジャンプ競技場は現在も国内の大会はもちろん、国際的な大会が数多く開催されているが、札幌市はラージヒルのジャンプ台がある都市としては世界最大であり、大倉山ジャンプ競技場は、ワールドカップ開催地の台の中で最も市街地に近い台として知られている。

しかもジャンプ台の住所は札幌市中央区。世界の有名なジャンプ台は、ほとんどが山奥にあり、選手は宿泊も含め競技場周辺で時間を過ごすしか術がない。だが、大倉山ジャンプ競技場は眼下に大通公園などの市街地が広がり、遊びにもすぐ行ける場所にあるので、世界のジャンパーたちは競技後に札幌の街に繰り出すことを楽しみにして大会に参加しているという。



大倉山ジャンプ競技場から市街地を望む（札幌市公文書館所蔵）

世界でもまれな 市街地に近いジャンプ台

あうるの杜

中館寛隆編集事務所
中館寛隆さん

Interview

評論と編集で北海道内の出版物をもり立ててきた、中館寛隆さんの「あうるの杜」です。

『読書北海道』

一九七七年に仲間二人と北海道読書新聞社を立ちあげ、書評紙『読書北海道』を発行し、その編集長を務めました。その後、二人は退社。第一三号から私個人が編集発行する月刊紙になりました。

発行の目的は、北海道に関する出版物の批評と情報提供、表現活動における批評の活性化でした。書評だけにとらわれることなく、色々な分野の表現や研究活動、あるいはメディアそのものも批評の対象にしました。

文学批評が紙面の柱のひとつでしたが、詩の笠井嗣夫と永井浩の論争など、論争をいくつかに生み、道内の文学活動に大きな刺激を与えてきたと自負しています。結局、『読書北海道』は一九八九年、一三二号で休刊し、その後はメールマガジンとして発行した時期もあります。

時代背景

『読書北海道』が出た時代は、ちょうど北海道百年の頃で、「新北海道史」の編纂があり、道史研究がぐっと進みました。それによって地方史研究も活性化し、市町村史ブームが起り、歴史やアイヌ民族関係など道内の出版が活発になった。

文学の方でも高橋揆一郎が芥

道内出版界を まとめたものを 残したい



中館寛隆
なかだて ひろたか

1950年釧路市生まれ。札幌市在住。
1977年北海道読書新聞社を設立。『読書北海道』の編集長を務める。1989年131号で休刊後はメール版を発行。1996年から2019年まで北海道新聞の北海道の本のコーナーを担当。北海道文学館評議員。編著に『読書北海道(縮刷版)』(1995年、北海道読書新聞社)、『必読北海道』(2003年、同)などがある。

考え方に変化が

川賞を受賞しましたが、その高橋や渡辺淳一がいた「くりま」という札幌の文芸同人誌がありました。渡辺淳一はすでに直木賞を手にしていましたが、「くりま」の書き手などが毎回のようになが川賞・直木賞の候補になり、盛り上がった時期でした。

『読書北海道』をやめた後、北海道新聞から、読書欄に北海道関係の本の記事を定期的に載せたという話があり、その枠のコーナーネットを去年の三月まで続けていました。二〇〇三年には、掲載されたものをまとめ、『必読北海道』という単行本も出版しま

した。

『読書北海道』をやっていた時は批判第一でした。いい仕事をしただけからこそその批判なんだけれども、書き手にも自負があるから、反発につながってしまった。しかし、道新の仕事をするようになってからは、なぜこの本を取り上げたのか、その価値を説かなければ意味が無い。だから『読書北海道』時代のように、批判するために取り上げるのはちょっと違うのかな、というふうに変わりました。

北海道の作家

今、北海道の作家は期待がもてますよ。『読書北海道』の時代よりもっとあります。昨年『肉弾』で大藪春彦賞を受賞した別海の河崎秋子など若手が次々とデビューしています。

岩見沢出身の水室冴子の功績を讃えて「水室冴子青春文学賞」が二〇一八年に創設されたけれど、いま文学賞がものすごい勢いで増えています。賞の本身も純文学だけでなく「氷室冴子賞」のようにエッセイメントも多い。多くの作家はそこからデビューしている。

これから

今後、北海道の出版業界は厳し

いんじゃないですか。道内出版社の数は雑誌社を除くと約一〇社でほとんどが札幌。一昨年北海道命名一五〇年だったのでもちよつと出版点数が増えたけれど、去年また戻ってしまった。去年は総計一五〇冊も出版していないと思います。

私が『読書北海道』をやっていた時代、道内の版元さんの一番のネックは流通でした。東日販が全部おさえていたから、取次に口座を持たないと本がさばけない時代がずうっとあった。しかし今は、ネットで買えばいいという時代になり、その問題はクリアできた。

けれども、ネットで本を買う人は、すでに買う本を決めている人じゃないですか。書店に来る人は、この本を読みたいので買いに来たという人だけではないはず。町の本屋さんには本への入口として大切な役割がありました。それが急速に消えているのは残念なことです。

もう七〇歳になるので難しいかもしれないけれど、北海道の出版界をキチッとまとめたものを残したいですね。戦後の北海道の出版社ブームなど掘り起こし記録に残したいテーマは、いっぱいあるのです。

「北海道弁」

東京の婚活支援サービス会社が、二〇〜三九歳の独身男女に「好きな方言」に関するアンケート調査を実施したところ、第一位になったのは博多弁でした。第二位関西弁、第三位京都弁、四位標準語、五位広島弁、六位沖縄弁と続き、なんと第七位に北海道弁がランクインしていました。ちよと驚きますよね。

その後津軽・秋田・仙台の東北弁系が続くのですが、北海道弁が独身男女に人気の方言というのが意外です。確かに「そだね」は、北見のカーリングチーム、ロコ・ソラーレのオリンピックでの活躍で躍有名になりましたが……。

道産子は方言を意識せずに、「手袋を履く」「ゴミを投げる」などを標準語だと思ってしゃべっているケースが多々ありますが、アクセントにも北海道独特のものがあります。例えば「椅子」。平坦に「いす」というのが標準語ですが、北海道は「いす」と前にアクセントを置きます。「たまねぎ」も正しいアクセントは「たまねぎ」なのですが、道民の多くは「たまねぎ」と言います。このように、堂々と人前で北海道弁を披露するものが、道産子の素晴らしさ・たくましさなのです。

私にも苦い経験があります。昔イベントの昼食としてスタッフに弁当を配り、「みんな、弁当あたった？」と尋ねたところ、本州の連中にビックリされたことがあります。「あたった食中毒」と思われたのです。

元道内FM局のカリスマ女性アナウンサーがこぼしていました。彼女は東京育ちなのですが、東京でタクシーに乗り、運転手さんと色々話していたら、「お客さん、北海道の人でしょうか？」と言われたそうです。

北海道弁って、知らず知らずのうちに人に使わせてしまう不思議なパワーがあるのかもしれないね！

OWL INFORMATION

北海道で躍動した人々の物語

北海道命名150年記念
ほっかいどう百年物語 下巻
STVラジオ・編
定価:本体1,200円+税

昨秋まで、北海道で放送されていた同名ラジオ番組の書籍化シリーズの特別編・下巻。北の大地に息づく先人たちの人間ドラマ20編を、2010〜2017年放送分原稿から厳選しました。

開拓事業唯一の成功例といわれた赤心社、アイヌ民族の地位向上を詠い天逝した歌人・遠星北斗をはじめ、ゆーぱり映画祭、優佳良織の木内綾、札幌千秋庵の岡部卓司など、現在に続く物語も収録しています。



中西出版
四六判、357頁
2019年11月刊行

後進が育つよき環境となるために

後継者が育つ“よき経営者”の役割
吉川孝・著
定価:本体1,200円+税

中小企業とその事業承継支援に関わり続けてきた著者が、事業承継を考えている経営者へ向けたメッセージを本にまとめました。

事業承継では経営の維持や税金対策が重視されがちですが、その本質は人間的側面にあると指摘。後継者の育成と決定、代表交代と進み中で経営者が抱える、葛藤や喪失感といった感情に寄り添う内容となっています。後進に道を譲る難しさに向き合う心を支える一冊です。

後継者が育つ “よき経営者” の役割

吉川 孝



中西出版
四六判、146頁
2019年12月刊行

新たな経路を探る治療の日々

続・ようこそ菜の花治療院へ
出会いの日々
山口千穂子・著
定価:本体1,400円+税

和紙灸での治療を行う小樽の鍼灸院での、進化する治療の日々を綴ったドキュメンタリー風エッセイの続編。

足裏やふくらはぎから経路を探り当て、和紙灸での効果的な治療法を確立した著者でしたが、ふとしたことから今度は手指に着目。手の甲や掌、さらには足裏や下肢にも新たな治療穴を見つけました。患者と向き合う実践の中で治療法が発見・発展していく過程が、柔らかな語り口で丁寧に記されています。



中西出版
A5判、171頁
2020年1月刊行

新たな碑を加えた「増訂」版

増訂 新版 武四郎碑に刻まれたアイヌ民族
民族の復権をめざして
杉山四郎・著
定価:本体1,200円+税

“北海道の名づけ親”松浦武四郎。幕末に活躍したこの探検家の6度にわたる蝦夷地探査の道程に建てられた碑を求め、北海道各地やサハリンへ赴き、碑と碑文全文を記録。後世の人々が碑に刻んだ武四郎の旅には、調査を支えたアイヌの人々の姿が残されていました。

2003年刊の初版を補筆した「新版」から3年。「北海道命名150年」を契機に建てられた新たな碑などを加えた最新「増訂」版です。



中西出版
B6判、281頁
2020年2月刊行

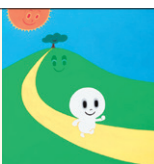
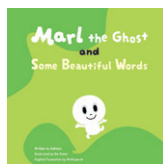
ご当地絵本シリーズ15年目の最新作には多言語版も登場！

おばけのマールとすてきなことば

〔多言語版〕Marl the Ghost and Some Beautiful Words
なかい れい・え、けーたろう・ぶん、みやうち あい・英訳
定価:本体1,200円+税

円山に住むおばけのマールはお出かけが大好き。いつものようにおともだちを見つけに、どんどんどんアプカシ アプカシ。けれども今日は、なんだかずいぶん遠くへ来たようで……。シリーズ10作目のマールは札幌から足を踏み出し、もっとたくさんのおともだちを探しに出かけます。歩いて歩いて、その道の先で待っているおともだちとは、どんなお話ができるのでしょうか。

誕生して15年目となる今回のマールは、4月の「ウボボイ」誕生へのエールを込めて、日本語／アイヌ語表記版の他に、英語・ハングル・繁体字・簡体字を併記した「多言語版」を発売予定。たくさんのおともだちと色々な言葉に囲まれて、マールは歩いて行きます。



※ご注文の際には
英語書名または
「多言語版」と
ご指定ください。



中西出版
A4変形判、32頁
2020年4月刊行予定

“多言語版”の表紙と本文ページの一部

新型コロナウイルスの感染拡大が止まらない。状況は日に日に悪化し海外では国境封鎖、都市封鎖が現実となっており、我が国も「感染の爆発的拡大」を懸念せざるを得ない事態である。経済活動の停滞の影響も大きくなっている。出版業界も同様であるが、先ごろ70年以上前に出版された小説「ベスト」に注目が集まり、増刷に至ったというニュースがあった。また、出版社が臨時休校中の小・中学生に向け、電子書店で期間限定無料公開をしたり、デジタル教材を無料で提供するという動きも伝えられる。休館中の図書館から、ネット経由での電子書籍利用の呼びかけもされた。小社のコンテンツも役立てばうれしい。混乱の早期終息を切に願うが、我々もやれることをやっていくしかない。(Y)

■発行・編集／中西出版(株)

〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34

電話011-785-0737 FAX011-781-7516

E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp

■発行責任者／林下英二

■発行日／2020年4月10日

http://nakanishi-shuppan.co.jp

